
ナンバー

Blackfruits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナンバー

【Nコード】

N7415K

【作者名】

Blackfruits

【あらすじ】

存在が数字で定義される世界。

確固たる存在の証明を得て生きることができるか。

全ては誰のみぞしる…？

（前書き）

この物語はフィクションです。

「おめでとう。昇格だよ」

言って渡されたのは『No.7』のプレートだった。

あれだけ頑張ったのにまだNo.7かと思った。

5以内にさえ入っていない。

目指すのはそんな中途半端じゃない。

私はちらりと自分が受け取ったプレートの先をみた。

遠く離れた場所に黒髪の男性がいた。

貼り付けたような笑みを全く絶やすことがない。

そして、その笑みを貼り付けた表情の目の奥は底知れなく冷たいような気がした。

彼の胸元には金色のプレートが付いていた。

私のプレートと同じ色なのに、重みは随分と違うのだ。

彼こそは『No.1』。私の目指す場所。

私の視線の先を知ってか知らずか、プレートを渡した男は語る。

「ナンバーは己の生存価値。奪うも奪われるも全て己次第。生きたいのならば、高みを目指すといい」

プレート渡しの男はそのまま私の後ろへと作業を続けに行った。

プレートは1000まで続き、それ以下が深みへと落ちて行った。いつも、思う。

あの深みは一体なんなのか。

不思議ではあるが、絶対に行きたくない、本能が拒絶している。

「No.1は今回も変わらず。さすがですね」

彼は声の主を一瞥しただけだった。

『No.1』には扉の外の世界へ向かうことが許される。

だが、彼は全く向かおうとはしなかった。

私は格子状の窓から差し込む光をみつめた。

あの外の世界はとても綺麗で、穏やかに違いない——私はそう思っ

ている。

プレート渡しが終わる、多くの者がその場を後にした。
ナンバー昇格に向けての仕事を探しに行くのだ。

資料の山を漁ってみた。

不意に声がかけられる。

「その仕事は頂いたよ、N o . 7」

入れ替わりになった元N o . 7がつぶやいた。

私は軽く舌打ちした。

代わりの仕事を探しに他の棚の資料を漁った。

向こうの方からN o . 4のプレートが横切った。

目の端にそのプレートを焼き付けて、手は緩めずに漁った。

そういえば、と頭の片隅で思い出す。

外の世界の事を教えたのは確か先ほどのN o . 4だった。

聞いた話では、外の世界では『名前』というものがあるらしい。

高みに登れなければ存在価値すら失われる『ナンバー』での格付け

ではなく、確固とした自分の存在定義となる『名前』が。

それが与えられればどんなに嬉しいだろう。

誰かに脅かされる奪い合いの恐怖もない。

確固たる存在が約束されるのだから。

そんなことを考えていると、資料探しの手が緩んだ。

それに気付いて、慌てて手を早める。

多分他の者も憧れなのだ。

外に出て、『名前』をもらうことが――

みつけた仕事の資料を手にとって、素早く読んだ。

そんなことを繰り返しながら、何時間も何時間も過ごした。

「おめでとう。昇格だよ」

前にも聞いた言葉だった。

プレート渡しの男が私の目の前に止まった。

いつもの表情にみえて、目の奥だけがきらりと光った。

「昇格おめでとう。No.1だよ」

その言葉に体に電撃が走った。

耳を疑った。

「No.1…？本当に？」

素で馬鹿みたいな声を出してしまった。

遠くにいた元No.1が自分の元に引き寄せられる。

黒髪の男はいつもの笑みをこちらに向けた。

「おめでとう。今回の昇格には選択権がついてくる。君は外に出る権利が与えられる。ただし、これに応じれるのはNo.1になった一回のみ。今回キャンセルしたら、次にNo.1とならなければいけない。さて、どうする？」

迷わずに即答した。

「行きます！外に…生きたい」

彼は目を細めた。

不意にプレート渡し of 男が黒髪の男の前で止まった。

『No.1』を奪われた男に新しくつけられるナンバープレートだった。

その文字は——『No.0』だった。

ナンバー…ゼロ？聞いたこともみたこともない。

ナンバーがついていない、処理対象でもなく…格付けされるナンバーでもないようだった。

彼は視線に気づいて、につこりほほ笑んだ。

「それじゃあ、許可しよう。おめでとうNo.1」

その言葉と同時に扉が開かれて、光が一斉に差し込んだ。

「そうそう」と黒髪の男は付け加えた。

「最後に一つ。その世界が本当にいいものなのかどうかは、分からないからね…全ては君の心次第」

その言葉を耳に残して、私の意識は急速に遠のいていくのだった。

（後書き）

こついうちよつと思議な世界というか、不思議な話は結構書くのが好きです。

こついう作品を長編で書いたりとかもしてみたいな、と少し思っていたりします。

ところで私は「名前」とか「番号」に関して不思議な感想を持っているのですが、みんなどうでしょうか。

読んでくださった皆様に感謝をこめて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7415k/>

ナンバー

2010年10月25日22時14分発行